

Title	医師の使命と医療保険制度
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1993, 20, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23997
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

医師の使命と医療保険制度

田 口 鐵 男*

平成5年の新春を迎えても国際経済と国内政治の混乱が続きそうである。冷戦構造の終焉とともに、超大国の軍事的対立は薄れたが、民族・宗教紛争や地域的な対立、南・北問題、経済力の不均衡、旧社会主義国の市場化、民主化の困難などの問題が深刻であり、世界的な不況は、自信と国際問題の解決へのエネルギーを失わせているように思える。

地球環境問題は、新たな国際協力課題としての合意を形成したが、世界は依然として新しい秩序も見出しえない混沌とした状態である。国内的にも、国際的にもここまで地球を追い込んだ理由を考えると、あまりにも、すべての人間が、自分たちの便利さのみを追求しすぎた結果にはかならない。それを追うあまりに失ったものや、反って不便になったことの数々を反省させられる。

人々は口を開ければ21世紀のことばかり云うが、20世紀の反省なくして果たして本当に明るい21世紀があるのであろうか。

いま、日本社会はある種の閉塞状態に陥っている。人々の意識には、このままでは日本の社会がこれ以上発展することは望めないのではないかと危惧がある。そのために大きな変革を必要としているし、強力なリーダーシップが要求され、政治改革が必須のものとなっている。

日本の民主主義は単なる移植に過ぎないとよく云われる。実質的な変化は伴っていないように思われる。そのため経済が安定するにつれ、

新憲法や、民主的制度はただ単に民主国家としての正統性を維持するための体裁に過ぎなくなっているのではないだろうか。民主主義とは名ばかりの金権政治で政党は腐敗し、全体主義的な官僚国家となっている。いろいろなことが、なしくずし的に拡張解釈され、いまや主権は全く民になく官僚にある。現代の社会とくに政治家、官僚はものごとをすべて総論的・抽象的な概念で把握、決定して個別的、個人的にはほとんど考慮を払っていない。このことは社会化・共産化・全体主義に連がるもので大いに国民1人1人が考えないと、ソ連の例をあげるまでもなく恐ろしいことになる。日本の現状をみるとあまりにも強大な官僚主義国家となっているので、かつてのソ連のそれと対比して、大変に心配である。

いまや生活大国となるように、国民1人1人が豊かさを噛みしめられる社会を創らなければならない。そのためには社会の構造的な変革が必要である。経済成長を優先することによって、たしかに国民経済全体は発展を遂げたが、個人生活のディテールを充実させる基盤の確立は不十分であり、生活の豊かさを目標とする発想に欠けていたのである。その典型として、医療制度の問題がある。

医療制度の社会化の限界

医療問題が新聞、テレビなどで報道されない日はない。医療問題は国民の保健に関すること

* 大阪癌研究会常任理事
大阪大学名誉教授
前大阪大学微研病院長

であるから当然というべきかも知れないが、問題は内容である。医療費にかかわることや、医事紛争の問題ばかりである。近年の日本の医師の社会的評価は甚だ芳しくない。医師の評価は低落する一方である。医師の質の低下も問われていることも否定し得ないが、このようになったのは、それなりの理由と時代的背景があるように思う。

その中で、やはり医療保険制度が一番大きな原因であると云えるのではないだろうか。日本の医療保険制度は、そもそも社会福祉政策からはじまり、社会保障政策として進展してきたわけである。それなりの成果は十分果たしてきたわけであるが、医療の社会化には限界があるし、この保険制度は完全に失敗し破綻をきたしている。そのしわよせが医師側になされ、そのために医療内容はいろいろな制限が課せられ、医師の質を低下させている。

医療費の個人負担の軽減、あるいは無料診療などが医療保障の第一義と考えて政府はやってきたわけであるが、経済的な破綻をきたしたために、いまや、保険経済の安定が総べてに優先するものとして、医師はその自由も主体性も抑圧されてしまっている。したがって、私は医療保険制度の悪運用こそが諸悪の根源であると考えている。そもそも、必要な医療費は国民が負担しないかぎり保険制度は成り立たないものである。

折角、医学は進歩しているにも拘らず、また、やる気の医師があるにもかかわらず、いまの医療制度のなかでは医師をスポイルし医療を低下させることになってしまっている。

医療保障の施策の結果が、医学そのものの凋落につながるということは致命的である。いうまでもなく、医療はもともと医師と患者の人間関係に基づくものであり、それがうまくいかにいままに、技術を提供するだけでは患者に評価されず、同時に提供する医師も決して満足できるものではない。現代は組織的な医療の社会化とか、診断と治療の技術の効率化などがもっばら求められ、医師や患者の個人などは、その中に呑み込まれてしまう様な時代である。このことは大変危険な思想である。医療の原点ともいべき医師と患者の個人対個人という関係を決して見失ってはならないのである。何故なら、人の生命は、あくまでも個人に個別的に所属するもので、集団に所属するものではないからである。

もちろん、医師は医療の使命を考え、自己の職業の厳しさを自覚してゆかねばならないが、現行の保険医療制度の現物給付、出来高払いという医療報酬取引は1日も根本的に改革してもらいたいものである。医療保険も国ではなく民間事業にすべきである。保険はあくまで保険者と被保険者の問題とすべきで医師が直接取引にかかわらないことである。

